

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

6月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,431.40 (25日)	1,313.95 (3日)
国内建値(円/g)	: 4,938 (25日)	4,585 (3日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 108.28 (25日)	109.66 (17日)

6月の海外金相場は、3日にドル安を背景に\$1,313.95/toz(トロイオンス)とあっさり\$1,300台に到達してスタートすると、上旬ではドル安基調の為替相場をにらんで\$1,300台前半で堅調に推移した。13日に石油輸送の要衝であるホルムズ海峡近くでタンカーが攻撃され、中東での地政学リスクが高まると、さらに上昇し、\$1,350水準と2016年8月以来の高値をつけた。この上昇基調はその後も続き、19日に米連邦公開市場委員会(FOMC)の結果から早期利下げ観測が強まると、\$1,380水準へ一段高の展開となり、週明けの24日には\$1,400台へ達し、翌25日には\$1,431.40と2013年5月以来約6年1か月ぶりの高値をつけた。この高騰の背景には、米・イラン関係の緊迫状態を受け、相対的に安全な資産とされる金を買う動きが活発化したこともあった。だが、月末では、大阪開催のG20で米中貿易協議が前進するとの期待が強まったため、また急騰による利益確定の売りも出たため、28日には\$1,409.00まで下げて越月した。

2. 為替相場推移

6月の為替相場は、3日に\$1=109.34円(TTS相場、以下同じ)と円高が進んでスタート、4日に米連邦準備理事会(FRB)による利下げ観測を受けて円高・ドル安が進行し、\$1=108.92円と本年1月初め以来5か月ぶりの円高・ドル安水準となった。しかし、その後中旬にかけては、米中貿易協議等を巡る不透明感が根強く、様子見状態が続いたことから\$1=109円水準で横ばい推移となった。この間、13日に中東のホルムズ海峡付近で日本関係の積み荷を運搬していた船が2隻攻撃されたと伝わったが、為替相場、特に円相場には目立った動きはなかった。

ところが、20日には、前日の19日に米連邦準備理事会(FRB)が、景気減速リスクが強まれば年内に利下げに踏み切る可能性を示唆したことで、円買いの動きが進

行、4 日を上回る\$1=108.79 円まで一気に円高・ドル安が進んだ。さらに、トランプ米政権が 24 日、イランへの追加経済制裁を発表し、中東情勢の悪化懸念が強まったことで積極的な円買いが増加、25 日には\$1=108.28 円と 2018 年 4 月以来 1 年 2 か月ぶりの円高・ドル安水準となった。その後月末にかけては、週末の G20 で米中貿易協議が進展するとの期待からやや円売りが優勢となり、28 日には\$1=108.79 円とややドルが戻して越月した。

6 月の円の対ユーロの動きは€1=122~124 円内の小動きに終始した。中旬で欧州中央銀行(ECB)のドラギ総裁が追加の金融緩和に触れたことで、円高が進行するかに見えたが、長くは続かなかった。

【国内】

1. 建値推移

6 月の国内金山元建値はほぼ一本調子で上昇した。しかし、7 月に入ると、すぐに低下し、以前の水準へ逆戻りしたことで、不安定な価格推移が続いている。

3 日に 4,585 円/g(グラム)でスタート、4 日に 4,600 円台へ達すると、14 日には 4,700 円台へ、20 日には海外相場の一段高から 4,800 円台へトントン拍子に上昇気流の階段を駆け上がった。25 日にはもう一段高い 4,900 円台となる 4,938 円をつけ、2015(平成 27)年 1 月以来 4 年 5 か月ぶりの高値となった。その後下げたものの、28 日には 25 日と同じ 4,938 円をつけて越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2019 年 5 月分=令和元年 5 月分)

生産 : 10,983 kg (前月比 49.3%増、前年比 4.2%減)

出荷 : 10,622 kg (前月比 68.6%増、前年比 12.1%減)

在庫 : 5,295 kg (前月比 7.3%増、前年比 4.7%減)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

5 月の生産は直島製錬所の定修明けから 2 か月ぶりの前月比増だが、前年同月比は 4 か月連続のマイナス。出荷は大型連休があるも、価格の下落基調から前月比大幅増。だが前年同月比は 4 か月連続の減。在庫は生産増から前月比増だが、前年同月比は 4 か月連続の減。在庫は低下気味で推移。

銅

【海外】

2019 年 6 月の LME 銅相場は米中貿易摩擦を背景に前月後半から引き続き \$6,000/t 割れ水準を頭重く推移した。

米中貿易摩擦は米国が対中制裁関税第 4 弾の発動を警告したのに対し、中国は対抗措置としてレアアースの輸出削減を示唆するなど一段と激しさを増した。

中国経済は 5 月の製造業購買担当者景気指数 (PMI) が 50 を下回り、工業生産指数は 2002 年以來の低い伸びにとどまり、輸入は前年同月比 8.5% 減と 2016 年 7 月以來の大幅な落ち込みとなるなど、制裁関税の影響が現れた。

米国は実体経済は堅調ながら、5 月の製造業 PMI は 50.6 と世界金融危機当時の 2009 年 9 月以來の低水準となった。このため、米連邦準備制度理事会 (FRB) は 18~19 日の連邦公開市場委員会 (FOMC) で米中貿易摩擦の影響をめぐる不確実性を理由に利下げに踏み切る可能性を示唆した。

米中貿易摩擦は世界経済にも影を落としている。US グローバルインベスターズ世界製造業 PMI は 49.8 と 2012 年 10 月以來の低水準となった。さらに、世界銀行は 2019 年の世界経済成長率見通しを 2.6% と 1 月時点から 0.3 ポイント下方修正した。米国は 2.5%、中国は 6.2% に据え置いた。世界貿易量も 2.6% 増と 1.0 ポイント引き下げ、世界金融危機以降で最も低い伸びとなる。

こうしたなか、G20 サミットが開かれた大阪で 29 日、米中首脳会談が行われ、トランプ大統領は制裁関税第 4 弾の発動見送りを表明したと伝えられる。

供給障害要因としては、コデルコのエルテニエンテ銅鉱山 (チリ) で 6 月 2 日、坑内作業員 1 名の死亡事故が発生し、操業を部分停止した。再開時期は未定。

グレンコアは 6 月 17 日、子会社モパニカパーマインズがムフリラ銅製錬所 (ザンビア) の操業を停止したと発表した。大型定修計画によるもので今年末までの予定で閉鎖される。

コデルコのチュキカマタ銅事業所 (チリ) の労働協約更改交渉は 5 月 25 日に決裂し、労組は 29 日にスト権を確立した。31 日から政府の仲裁調停が開始されたが、合意されず、労組は 6 月 14 日ストに突入した。その後、会社側が新たな提案をしたが、労組は 22 日受け入れを拒否し、ストライキを継続した。会社側は更なる改善案を提示し、労組は 27 日受け入れを決定し、ストを終結した。新協約の内容は賃上げ率 1.2%、一括給付金 20,000 ドル、医療及び退職年金手当の改善など。会社側は 6 月 28 日、フル操業を再開したことを確認した。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2019 年 1~3 月の世界の銅鉱石生産は前年同期比 1.3% 減の 4,896 千 t、地金生産は 1.1% 減の 5,818 千 t、消費 5,850 千 t で横ばい、地金需給バランスは +81 千 t から ▲32 千 t へとほぼバランス推移した。報告在庫は 23.6% 減の 1,334 千 t、在庫/消費比率は 3.6 週間から 2.7 週間へと低水準で推移している。

鉱石生産の内訳は精鉱が 1%、SXEW は 3.5% 減少した。国別にはチリが鉱石品位低下を主因に 5% 減少、インドネシアはグラスベルグ、バツーヒジャウ鉱山の採掘鉱体の移行により 52% 減少した。コンゴ民主共和国 (DRG)、ザンビアは休止鉱山の

再開が一部鉱山の減産に相殺されて 1.7%の増加にとどまった。ペルー、オーストラリア、中国、モンゴルは鉱石品位の改善や前年の供給障害による減産の反動で増加した。地域別には、アフリカと北米は2%、オセアニアは5%増加したが、アジアとラテンアメリカは3%、ヨーロッパは3.5%減少した。鉱山稼働率は81.8%から81.1%へと横ばい。

地金生産の内訳は一次生産が1.5%減少、二次生産は横ばい。国別には、チリがチュキカマタ製錬所の環境改善工事に伴う操業停止により32%減少した。インドはツーチコリン製錬所が2018年4月から操業を停止していることにより45%減少。ザンビアは電力供給途絶、製錬所の停電に加え、2019年1月1日付で銅精鉱に輸入関税(5%)が導入されたことなどから28%減少した。その他主要生産国ではドイツ、日本、ペルー、米国が定修閉鎖のため減少。中国は能力増強を背景に増加。オーストラリア、ブラジル、ポーランドは前年の供給障害による減産の反動から増加した。地域別には、アジアが2.5%、オセアニアは24%増加したが、ヨーロッパは横ばい、アフリカは8%、アメリカは12%減少した。精製工場の稼働率は86.6%から83.2%に低下した。

中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)は4%増加した。その他主要消費国のなかではインドが増加、日本は横ばい、EU、米国は減少した。中国を除く世界は2%減少した。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/23 700 6/3 670 6/11 680 6/17 670 6/20 680 6/26 690

2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2019年5月分=令和元年5月分)

生産 : 133,200t (前月比 10.5%増、前年比 6.5%減)

出荷 : 119,100t (前月比 1.7%減、前年比 15.0%減)

在庫 : 117,600t (前月比 14.3%増、前年比 8.5%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2019(令和元)年5月の銅地金生産は前月比10.5%増、前年同月比6.5%減の133.2千tと前月比は定修明けで2か月ぶりに増加、前年比は4か月連続で減少した。出荷は前月比1.7%減、前年比15.0%減の119.1千tでそれぞれ2か月連続と3か月連続の減少。内訳は内販が前月比は連休の影響で9.8%減、前年比は6.5%減の75.7千tとそれぞれ2か月連続と3か月ぶりの減少。輸出は前月比16.4%増、前年比26.8%減の43.3千tでそれぞれ3か月ぶりの増加と3か月連続の減少。内販のうち電線向けは前年比4.5%減の48.2千tで3か月ぶりの減少。伸銅品向けは8.7%減の25.5千tで2か月連続の減少。在庫は前月比14.3%増、前年比8.5%増の117.6

千tでそれぞれ2か月連続と3か月ぶりの増加となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2019(令和元)年5月の銅電線出荷は前月比4.4%減、前年同月比3.3%増の56.8千t(推定)と前年比は2か月連続の増加となった。うち内需は前年比6.1%増の55.5千tで2か月連続の増加、輸出は52.0%減の1.3千tで2か月連続の減少。内需の部門別には、自動車と建設電販が8か月連続、通信と電力は2か月連続の増加。電気機械は9か月連続、その他内需は6か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、2019(令和元)年5月の伸銅品生産は前月比3.7%減、前年同月比8.4%減の62.3千t(速報)と6か月連続の前年比減。うち内需向けは前年比7.0%減の52.6千tで5か月連続の減少、輸出は15.3%減の9.7千tで7か月連続の減少。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が4か月連続、エアコン向けの銅管は3か月連続、自動車端子向けの黄銅条は4か月連続の減少、コネクタ向けの青銅板条は10か月連続の減少となった。

鉛

【海外】

2019年6月のLME鉛相場は引き続き米中貿易摩擦を背景に\$1,800~1,900/t圏を頭重く推移した。

米中貿易摩擦は米国が対中制裁関税第4弾の発動を警告したのに対し、中国は対抗措置としてレアアースの輸出削減を示唆するなど一段と激しさを増した。

中国経済は5月の製造業購買担当者景気指数(PMI)が50を下回り、工業生産指数は2002年以来の低い伸びにとどまり、輸入は2016年7月以来の大幅な落ち込みとなるなど、制裁関税の影響が現れた。

米国は実体経済は堅調ながら、5月の製造業PMIは世界金融危機当時の2009年9月以来の低水準となった。このため、米連邦公開市場委員会(FOMC)で米中貿易摩擦の影響をめぐる不確実性を理由に利下げに踏み切る可能性が示唆された。

米中貿易摩擦は世界経済にも影を落としている。USグローバルインベスターズ世界製造業PMIは49.8と2012年10月以来の低水準となった。さらに、世界銀行は2019年の世界経済成長率見通しを2.6%と1月時点から0.3ポイント下方修正した。米国は2.5%、中国は6.2%に据え置いた。世界貿易量も2.6%増と1.0ポイント引き下げ、世界金融危機以降で最も低い伸びとなる。

こうしたなか、G20サミットが開かれた大阪で29日、米中首脳会談が行われ、トラ

ンプ大統領は制裁関税第4弾の発動見送りを表明したと伝えられる。

鉛独自の要因としては、LME在庫が年初の100千t台から5月末現在70千t割れへと需給がタイト化するなか、6月に入って直物と三か月先物の価格スプレッドがコンタンゴからバックワーデーションに転じている。6月末現在、LME在庫は66千tと2009年4月以来の低水準でバック幅は\$13。

供給障害要因としては、ニューモントゴールドコープのペナスキート金銀鉛亜鉛鉱山(メキシコ)が6月17日、精鉛出荷を開始したと発表した。同鉱山は過剰な用水に対する近隣住民の抗議や運送業者とのトラブルを背景とした道路封鎖のため、4月29日以降、生産停止を余儀なくされていた。生産能力は金16t/年、銀871t/年、亜鉛204千t/年、鉛91千t/年。

ニルスターは6月6日、ポートピリー鉛製錬所(豪)の精製鉛出荷に不可抗力条項を発動したと発表した。5月28日に停電のため溶鉛炉の操業が停止したことによるもの。溶鉛炉の再開は7月第2週の見通し。2018年の生産量は160千t。同製錬所では再建プロジェクトを実施中だが、昨年12月は旧炉の大気汚染排出量が基準値を超えたため操業を停止した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2019年1~4月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比横ばいの1,544千t、地金生産は2.3%増の3,870千t、消費は2.3%増の3,909千t、地金需給バランスは前年同期の▲38千tから▲39千tへとやや不足気味に推移している。4月末の地金の報告在庫は前年同月比17.6%減の365千t、在庫/消費比率は2.0週間から1.6週間に低下した。

鉱石生産はアメリカが7.6%、ヨーロッパは7.4%、アフリカは6.7%増加、アジアは2.7%、オセアニアは1.3%減少した。国別には、インド、ペルー、スウェーデンが増加、中国は減少した。地金生産はアジアが2.4%、アメリカは2.6%、オセアニアは22.0%増加、ヨーロッパとアフリカは横ばいとなった。国別には、中国、インド、韓国が増加した。消費はアジアが6.0%、アフリカは2.5%増加、オセアニアは横ばい、アメリカは2.5%、ヨーロッパは4.9%減少した。国別には、中国、インドが増加、ドイツ、韓国、米国は減少した。

中国は鉱石生産が5.0%減の666千t、鉛精鉛のネット輸入は30.7%増の260千t、地金生産は2.0%増の1,580千t、地金の輸出入は13千tのネット輸出から67千tのネット輸入に転じた。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は7.0%増の1,634千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/7 271 5/13 264 6/3 260 6/12 272 7/1 269

6月はLME鉛相場が月初から月末にかけて上昇基調を辿ったため、鉛建値はそ

の価格水準を切り上げた。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2019年5月分=令和元年5月分)

生産 : 16,903t (前月比 4.9%増、前年比 8.1%減)

出荷 : 14,819t (前月比 8.3%減、前年比 2.6%増)

在庫 : 14,879t (前月比 15.8%増、前年比 6.9%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

5月の生産は前月比増だが、前年同月比は細倉製錬所の短期定修より再びマイナス。出荷は大型連休から前月比マイナスだが、前年同月比は3か月連続でプラスとなった。蓄電池向けが回復基調を示している。在庫は出荷減から前月比増だが、前年同月比は15か月ぶりの減。

3. 需要部門動向

4月の自動車生産台数は前年同月比4.7%増の814,351台となり、2か月ぶりに前年同月を上回った。乗用車は前年同月比2か月ぶりのプラス、トラックも同2か月ぶりのプラス、バスも同2か月ぶりのプラスとなり、前月とは逆に、すべての車種で上昇傾向を見せた。

5月の自動車輸出台数は前年同月比2.9%増の354,984台となり、3か月ぶりに前年同月を上回った。

一方、4月の二輪車生産台数は前年同月比25.2%減の39,977台と5か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、4月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,854千個(前年同月比2%増)と3か月ぶりに上昇したが、自動車用以外の鉛蓄電池は571千個(同2%減)と9か月連続で減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,452千個(同1%減)と3か月ぶりに上昇した。

鉛関連製品生産統計

		3月	4月
自動車	数量(台)	900,593	814,351
	前年同月比(%)	95.9	104.7
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,892	15,744
	前年同月比(%)	99.7	95.3

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2019年6月のLME亜鉛相場は引き続き米中貿易摩擦を背景に前月比一段安の\$2,500~2,600/t圏を頭重く推移した。

米中貿易摩擦は米国が対中制裁関税第4弾の発動を警告したのに対し、中国は対抗措置としてレアアースの輸出削減を示唆するなど一段と激しさを増した。

中国経済は5月の製造業購買担当者景気指数(PMI)が50を下回り、工業生産指数は2002年以来の低い伸びにとどまり、輸入は2016年7月以来の大幅な落ち込みとなるなど、制裁関税の影響が現れた。

米国は実体経済は堅調ながら、5月の製造業PMIは世界金融危機当時の2009年9月以来の低水準となった。このため、米連邦公開市場委員会(FOMC)で米中貿易摩擦の影響をめぐる不確実性を理由に利下げに踏み切る可能性が示唆された。

米中貿易摩擦は世界経済にも影を落としている。USグローバルインベスターズ世界製造業PMIは49.8と2012年10月以来の低水準となった。さらに、世界銀行は2019年の世界経済成長率見通しを2.6%と1月時点から0.3ポイント下方修正した。米国は2.5%、中国は6.2%に据え置いた。世界貿易量も2.6%増と1.0ポイント引き下げ、世界金融危機以降で最も低い伸びとなる。

こうしたなか、G20サミットが開かれた大阪で29日、米中首脳会談が行われ、トランプ大統領は制裁関税第4弾の発動見送りを表明したと伝えられる。

供給障害要因としては、ニューモントゴールドコープのペナスキート金銀鉛亜鉛鉱山(メキシコ)は6月17日、精鉱出荷を開始したと発表した。同鉱山は過剰な用水に対する近隣住民の抗議や運送業者とのトラブルを背景とした道路封鎖のため、4月29日以降、生産停止を余儀なくされていた。生産能力は金16t/年、銀871t/年、亜鉛204千t/年、鉛91千t/年。

中国では、漢中製錬が水口山亜鉛製錬所の操業を4月に部分再開し、6~7月に生産量20千t/月に到達する目標。株洲製錬集団は衡陽亜鉛製錬所の第2生産ラインを4月末に再開し、6月にフル生産に到達する見通し。同製錬所は環境汚染問題のため昨年12月、株洲市から移設された。生産能力は300千t/年。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2019年1~4月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比1.5%増の4,188千t、地金生産は2.3%減の4,250千t、消費は1.3%減の4,347千t、地金需給バランスは前年同期の▲53千tから▲97千tへとやや供給不足気味に推移している。4月末の地金の報告在庫は前年同月比18.5%減の907千t、在庫/消費比率は4.2週間から3.3間に低下した。

鉱石生産はオセアニアが57.0%、ヨーロッパは7.7%、アフリカは21.9%増加、アジアは6.1%、アメリカは3.9%減少した。国別には、オーストラリア、ヨーロッパ、ナミビア、南アフリカが増加、中国、インド、メキシコ、ペルー、米国は減少した。地金生産

はアメリカが3.9%、オセアニアは5.5%増加、アフリカは横ばい、アジアは4.3%、ヨーロッパは1.3%減少した。国別には、メキシコ、ペルーが増加、中国、インド、ロシアは減少した。消費はアメリカが4.4%、アフリカは12.8%増加、ヨーロッパは横ばい、アジアは2.8%、オセアニアは3.8%減少した。国別には、中国が減少、ヨーロッパ、インド、日本、米国はほぼ横ばいとなった。

中国は鉱石生産が5.3%減の1,290千t、亜鉛精鉱のネット輸入は8.9%減の439千t、地金生産は5.0%減の1,765千t、地金のネット輸入は28.0%増の215千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は4.6%減の1,928千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/7	367	5/10	352	5/15	349	5/22	355	5/27	349	6/3	340
6/6	328	6/11	334	6/17	331						

6月の亜鉛建値は、LME 亜鉛相場が月初から月末にかけて下げたため、弱含み推移となった。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2019年5月分=令和元年5月分)

生産	: 45,673t	(前月比 3.1%増、前年比 5.1%減)
出荷	: 38,733t	(前月比 9.0%減、前年比 6.1%減)
在庫	: 70,142t	(前月比 11.0%増、前年比 6.9%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

5月の生産は前月比増だが、前年同月比は3か月連続の減と低調な生産が続く。出荷は大型連休と需要の低迷から前月比大幅減、前年同月比も3か月連続のマイナスと悪い状況に歯止めがかからず。この数か月間、高炉に元気がなく、めっき向け販売も下がり気味。在庫は2か月連続の前月比増だが、前年同月比は生産低調から8か月連続の減。

3. 需要部門動向

5月の鉱工業生産指数は前月比2.3%増、前年同月比1.8%減の105.2(季節調整済、2015年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月連続で上昇、前年同月比は4か月連続の低下。国内需要が強く、自動車や自動車部品の生産が好調だった。6月には反動減が見込まれるため、経産省は「生産は一進一退」との基調判断を維持した。

15業種のうち、13業種で上昇した。自動車の伸び幅が大きく、前月から5.2%上昇した。5月に国内で新モデル車の発売が多く、生産が増えた。海外向けも需要が回

復しているという。電気・情報通信機械工業は同 4.4%上昇だった。国内でデスクトップ型パソコンや開閉制御装置などの大型受注が相次いだ。

5月の出荷指数は前月比1.6%増の104.3と2か月連続で上昇したが、前年同月比は1.5%減と6か月連続で低下した。

一方、在庫指数は前月比0.6%増の104.4、在庫率指数は前月比1.6%増の106.3となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、6月が前月比1.2%の低下、7月は同0.3%の上昇を見込んでいる。

4月の亜鉛めっき鋼板生産は前年同月比4か月連続の減となり、弱含み状態続く。

4月の伸銅品生産量は64,700t(確報値、対前年同月比▲7.3%)(対前月比▲4.2%)、対前年同月比は5か月連続のマイナス(2月▲4.1%、3月▲7.1%)。全14品種中、対前年比プラスは3品種。内需向け生産:54,772t(速報値、以下同じ)、4か月連続の対前年比マイナス(▲5.1%)。輸出向け生産:10,188t、6か月連続の対前年比マイナス(▲15.9%)。

黄銅製品では、黄銅条が8,363t(対前年比▲2.1%)、3か月連続の対前年比マイナス。中国市場での家電販売不振の影響を受けて低調。黄銅棒は15,182t、4か月連続の対前年比マイナス(対前年比▲6.7%)。水栓金具と中国向け設備関連については低調な状態が継続中。

亜鉛関連製品生産統計

		3月	4月
亜鉛めっき鋼板	数量(千t)	917	800
	前年同月比(%)	96.7	91.2
黄銅製品	数量(t)	27,199	26,976
	前年同月比(%)	90.5	93.8
亜鉛ダイカスト	数量(kg)	1,917,109	1,477,863
	前年同月比(%)	104.7	89.0
亜鉛華	数量(t)	5,385	5,061
	前年同月比(%)	95.0	103.4

(出所:(一社)日本鉄鋼連盟、経済産業省生産動態統計調査)